

日本の子供達に夢を届け続けた アンパンマン



お腹のすいた人を助けるアンパンマンは特別な存在。
弱い人を助けるヒーローは色々あるが……
アンパンマンは94歳で亡くなった「やなせたかし先生」の傑作中の傑作。

『アンパンマン』まで、やなせ先生は、「自分にはマンガ家としての代表作がない」ことがコンプレックスだったそうです。

生活が苦しいわけではないけれど、このまま年を重ねていくのは寂しい。そんななか、描かれたのが『あんぱんまん』でした。

(第一作は、ひらがなで『あんぱんまん』)

この作品には、戦争を体験したやなせ先生の「思い」がこめられています。

61年に「手のひらを太陽に」を作詞。69年に絵本「やさしいライオン」を刊行した。73年には雑誌「詩とメルヘン」を創刊するとともに、最初の「あんぱんまん」の絵本を出版。88年に日本テレビ系で「それいけ！ アンパンマン」のアニメ放送が始まり、子供たちに大人気となった。

70歳近くの1990(平成2)年に『アンパンマン』で日本漫画家協会賞大賞を受賞している。

やなせ先生は、お兄さんを戦争で亡くしておられます。

先生自身は、「運良く戦闘が行われなかった地域を転々としていた」そうなのですが、そうやって「悲惨な戦場を体験することもなく、生き延びてしまったこと」は、客観的にみれば「幸運」ではあっても、本人にとっては辛くもあったのです。

僕は軍の命令で中国に派兵され、遥か上海にまで行ったけれど、そのとき教えられたのは、「いま、中国の民衆が困って苦しんでいるから、助けなければならぬ。彼らを解放しなくてはならない。だから、これは正義のための戦いなのだ」ということでした。ところが戦争が終わると、「日本軍が中国民衆を苛めた」となった。「日本軍は悪魔だ」「凶暴剥き出しの軍隊だ」ということになり、つまり、向こうが正義でこっちが悪というふうにすり替わってしまったのです。

そのとき、正義というのはある日を境に、いとも簡単に逆転してしまうことを痛切に知ったわけです。いかに正義というものが信じ難いものか、骨身に染みるほど感じたのです。そして、僕たちが青春を犠牲にしてまで信じてきた正義とは、いったい何だったのか。あれは、まやかしの幻影にすぎなかったのか、って考えるようになりました。

長年にわたり紛争を続けているイラクとクウェート、あるいはアラブ諸国とイスラエルの問題にしてもいえることです。それぞれの側にそれぞれの正義があり、いったい、どちらが本当の正義なのかわかりません。



ヒーローとしてのアンパンマンが誕生した背景には、やなせたかしの従軍経験がある。戦中はプロパガンダ製作に関わっていたこともあり、とくに戦いのなかで「正義」というものがいかに信用しがたいものかを痛感した。しかし、これまでのヒーローは「正義」こそ口にするが飢えや空腹に苦しむ人間へ手をさしのべることはしなかった。戦中、戦後の深刻な食糧事情もあり、当時からやなせは「人生で一番つらいことは食べられないこと」という考えをもっていた。50代で「アンパンマン」が大ヒットする以前のやなせは売れない作家であり、空腹を抱えながら「食べ物に向こうからやって来たらいいのに」と思っていたという。こういった事情が「困っている人に食べ物を届けるヒーロー」という着想につながった。アンパンマンと「正義」というテーマについて、やなせは端的に「『正義の味方』だったら、まず、食べさせること。飢えを助ける。」と述べている。

また別のインタビューでも、やはり「究極の正義とはひもじいものに食べ物を与えることである」と述べている。さらに主人公をあんパンにした理由を「外の皮はパン＝西洋、内側はあんこ＝純日本。見た目は西洋でも心は日本人である。」と解説している。かつて、たびたび起こった「顔を食べさせることは残酷だ」という批判にも、「あんパンだから大丈夫です」と冗談めかして反論していた。

空腹の者に顔の一部を与えることで悪者と戦う力が落ちると分かっていても、目の前の人を見捨てることはしない。かつそれでありながら、たとえどんな敵が相手でも戦いも放棄しない。これらの点について「ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにならず自分も深く傷つくものです」第1作「あんぱんまん」のあとがきよりと、自身が絵本のあとがきで語っている。

そしてアンパンマンは食べられることはあっても、食べることはない。それは単純に(カレーパンマンやしよくぱんまんとは異なり)アンパンマンが食事をする場面が一度も描かれないことにも現れている。「飲食」が大きなテーマとなった世界で、本来の「食べる」と「食べられる」の食物連鎖的な循環を裁ち切り、自らを食事としてのみ差し出す自己犠牲こそがアンパンマンのヒーロー性を支えているのである¹⁶